

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	林 加奈子
論文題目	社会参加に向けた開発教育の目標と方法に関する研究
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、学習者が共に生きることのできる公正な地球社会づくりに参加することをねらいとする開発教育にみる社会参加の概念を問い、多面的に捉え直す中で、これからの開発教育の目標と方法を描き出すことを目的とした論文である。</p> <p>これまでの開発教育では、行動目標として開発支援・開発協力への参加そして参加型開発が重視され、また学習方法では参加型学習に示されるように開発問題を批判的に読み解き、学習過程への参加をめざす多様な方法・手法が重視されてきた。またここ十年では、「開発＝地域づくり」という視点や「持続可能な開発」「持続可能な開発のための教育」の視点が注視される中、「社会参加」そのものを問い直し、そのための開発教育の目標・方法を再検討する必要性が課題として浮びあがってきていた。そのような状況にあって、本論文は、既存の開発教育にみる社会参加の概念に、市民参加・文化的参加・正統的周辺参加の概念を加味し、開発教育の社会参加の概念を「権利としての参加」「批判的参加」「共感的参加」「受容的参加」として多面的に再整理し、そしてその社会参加の概念を基盤とした学習目標として、相互に関連する「権利を知り、行使し、創出する力」「批判する力」「共感する力」「受容し受容される力」を提案している。さらに学習方法として、「問題解決」「感性」「受容」の視点を組み入れた方法を学習プロセス論・ふりかえり論・カリキュラム論として提示している。また実践ではこれらの目標・方法は交錯することが想定できるため、その交錯状況に関しては、筆者自身が関わった神奈川県川崎市、東京都荒川区・台東区近辺、横浜市緑区での実践事例を通して示している。</p> <p>本論文の章構成とその要点は以下の通りである。第1章「社会参加の多面性」では、市民参加論、文化的参加論、正統的周辺参加論を取り上げ、それぞれの特徴を描き出すことから社会参加の多面性を浮びあがらせている。</p> <p>第2章「開発教育における社会参加」では、まずこれまでの開発教育における社会参加の捉え方を、1970年代以降の「開発支援・開発協力への参加」「個々人のライフスタイルの転換に向けての参加」「地域にみる外国人労働者や移民が抱える問題の解決に向けた参加」といったもの、さらに2000年代にみる「開発＝地域づくりとした捉え方に基づく地域づくりへの参加」といった時代的变化の中に探っている。そして、社会とは政治、経済、文化の社会領域、そして公、共、私という活動領域から成り立つものであり、またそれらが重層的に重なり合う場であることを踏まえ、そこからこれから開発教育に必要となる社会参加の概念として、「権利としての参加」「批判的参加」「共感的参加」「受容的参加」の4つの社会参加を互いに関連し合うものとして描き出している。</p> <p>第3章「社会参加に向けた開発教育における目標構造」では、第2章で描き出したこれからの開発教育に必要となる社会参加につなげていくために、学習者が身につけていくべき力を「権利を知り、行使し、創出する力」「批判する力」「共感する力」「受容し受容される力」の4つの力として提示し、その関連性を目標構造として描いている。</p> <p>第4章「社会参加に向けた開発教育における方法」では、社会参加に向けた開発教育に必要な方法論的視点として、「問題解決」「感性」「受容」の3つを提示し、この3つの視点を組み入れた方法を、学習プロセス、ふりかえり、カリキュラムとして示している。</p> <p>第5章「事例にみる社会参加に向けた開発教育の目標と方法」では、神奈川県川崎市、東京都荒川区・台東区近辺、そして神奈川県横浜市緑区の3つの地域事例を取り上げ、地域社会の問題を解決していくプロセスに本論で提示した目標である4つの力とその方法がいかに内在し、また相互に関連し</p>	

氏名 林 加奈子

ているかを示している。

第6章「社会参加に向けた開発教育の目標と方法の意味」においては、特にこれまで開発教育ではそれほど注視されてこなかった「共感的参加」「受容的参加」に力点を置き、多面的な社会参加の中に関連性をもって位置づけたことにより、社会参加に向けた開発教育の目標として、4つの力を互いに関連させながら育成することが可能であることを示したこと、そして従来の開発教育には見られなかった多様な方法の広がりを示したことの意味が示されている。

公開審査会では、開発教育における社会参加を多面的にかつ関連づけて捉え、社会参加に向けた開発教育の目標と方法を、理論的実践的に多面的に描き出したことが高く評価された。一方、社会参加における「経済的参加」の視点をより明確にできなかったか、また第3章の目標論として4つの力が析出されているが、たとえば「統治・自治する力」を明示することもできるのではないかとの意見も出されたが、「市民参加論」や「批判する力」にそれらの視点を十分ではなくとも含めて論じられていることもあり、今後のさらなる研究課題として確認された。また実践事例の読み解き方に関しても、より丁寧な実践研究の進め方への要望も出された。

以上のような課題も示されているが、これまでの開発教育の理論・実践を踏まえ、これからの開発教育の目標と方法の方向性を多面的な社会参加の視点から理論的実践的に示した本論文の意味は極めて大きく、審査委員全員一致で、本論文を博士学位を授与するにふさわしい論文であると判断した。

公開審査会開催日	2017 年 4 月 20 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	山西 優二	国際教育学・開発教育学・共生社会論	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	増山 均	社会教育学・社会福祉学	
審査委員	日本大学法学部・教授	佐渡友 哲	国際関係論	
審査委員				
審査委員				